

かたりべ151

豊島区立郷土資料館・芸術文化推進グループだより



開館40周年記念

企画展 新・豊島風土記 開催中！

三月一六日(日)まで

開館時間：午前9時～午後4時30分

休館日：月曜日(2月24日は開館)、2月25日

豊島区立郷土資料館は、昭和五九(一九八四)年六月一八日に開館し、令和六(二〇二四)年に四〇周年を迎えました。

『豊島区史』編纂事業を引き継ぐ博物館としてスタートし、五年間にわたる「歴史生活資料所在調査」をきっかけに、区民をはじめ多くの皆様から豊島区域に関する文書資料や生活資料、図書、写真などをご寄贈、ご提供いただきました。

現在、当館が所蔵している文書資料は約一〇万点、生活資料は約一万五千点にのぼります。

平成二九(二〇一七)年には常設展示をリニューアルして、「豊島台・本郷台に生きるくひと・景観・暮らし」をテーマに、この地に人類が暮らし始めた約三万年前から現代にいたる豊島区域の歴史を紹介しています。

今回の企画展では、常設展示を一部展示替えして、縄文時代く江戸時代の資料を中心に、区ゆかりの美術作品と文学資料を新たに展示します。あわせて学校連携の一環として、小学校三年生の郷土学習に対応したまちの移り変わりと人びとの暮らしの様子を、景観写真と昭和三〇く四〇年代をイメージした和室の再現展示で紹介します。

本展の開催にあたり、作品・資料をご寄贈、ご提供いただいた皆様、ご協力いただいた関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

★展示見どころ解説(常設展と企画展)

2月22日(土) 午後2時～約40分間

※展示室に直接お集まりください。

※参加者には開館40周年記念オリジナルクリアファイルをプレゼントします。

また会期中には、クイズラリーのほか、親子参加のワークショップや紙芝居「豊島の民話 小さい桶」の上演も行います。詳しくは当館ホームページをご覧ください。

★二く三頁では企画展の見どころをご紹介します。

縄文時代の豊島

豊島区の地形は江戸時代以降の開発により大きく改変されています。これによって縄文時代の遺跡の多くは失われてしまった可能性が高いです。しかし、江戸時代の遺構などに縄文時代の遺物が残されることがあり、区内のほぼ全域から縄文土器が出土しています。また、少ないながら染井遺跡を中心に狩猟に使う陷阱穴や竪穴住居が発見されています。

縄文土器の形や文様は、時期や地域によって違いがあります。豊島区出土の縄文土器は縄文時代を通じて東関東、東海、中部、東北地方など様々な地域の影響を受けたとみられます。武蔵野台地の東端に位置する豊島区の地域性をあらわしているといえるでしょう。

区内の遺跡から出土した縄文土器、石器八〇点以上が一堂に会する初めての展示となります。また昭和一九（一九四四）年に高松で縄文時代の打製石斧を発見した三輪善之助氏についても紹介しています。



縄文土器 深鉢
(染井遺跡)
豊島区教育委員会管理

古代豊島と武蔵野の風景

古代の豊島区域や豊島を含む武蔵野の地域には、どのような風景が広がっていたのでしょうか。当時の詳細を記した文献は非常に少なく、その全容を明らかにすることは困難ですが、「豊島」の地名の由来、古代律令制下の武蔵国豊島郡に関する記述、区内の神社に残る伝承・伝説から見る古代の豊島、日記文学・紀行文学に描かれた武蔵野の様子などを通じて、その風景の一端を垣間見ることができます。

古代の豊島や武蔵野で生活していた人々、長い旅路の中で訪れた人々が何を思い、どのような風景を目にしていたのか——— 当時を思いを馳せながらご覧いただけましたら幸いです。



古代豊島と武蔵野の風景
展示コーナー

豊島氏と地域社会

中世において豊島区域を含む東京北部には、豊島氏と呼ばれる大きな勢力をもった武士団がいました。豊島氏は、桓武平氏系坂東平氏の一流とされ、中世を通じて長い間存続します。まさに東国の政治史を代表する存在といえるでしょう。

今回の展示では、豊島氏の系図として注目された「桓武平氏諸流系図」や、豊島氏関係の根本史料である「豊島・宮城文書」を写真で展示し、中世の豊島氏の実像に迫りたいと思います。

もちろん中世には、豊島氏のような武士団だけでなく、一般民衆も生活していました。今回の展示では、当館に寄贈・寄託された板碑（中世に造られた石造の供養塔）や、「山吹の里伝説」を取り扱い、中世東国の地域社会を垣間見ることができ、貴重な資料を展示します。



題目板碑
(巽一太郎氏寄贈)

江戸の名所と名物

江戸時代の豊島区域の名所といえば、雑司ヶ谷・高田地域が有名です。

子授け・安産・子育ての神として信仰を集めた雑司ヶ谷鬼子母神堂は、江戸や近郊からの参詣客で賑わい、参道周辺には茗荷屋、蝶屋などの料理茶屋が軒を連ね、大いに繁盛しました。

また参詣土産として風車、麦藁細工の角兵衛獅子、川口屋の飴、すすきみずくが人気を集めました。

さらに少し足をのびれば、下高田村の富士見茶屋からの富士山の眺望や、姿見橋（面影橋）が架かる神田上水（神田川）流域での蛍狩りなど、四季折々の風情を楽しむことができました。

ここでは、浮世絵や襖絵、川口屋関係資料のほか、発掘調査で出土した料理茶屋に関する資料などを紹介します。



鬼子母神詣土産べんけい図 襖
今宮樹美枝氏寄贈

豊島区と文学

戦前の豊島区は、畑や雑木林の広がる静かな郊外でした。明治中期から大正期にかけての鉄道の開通により、交通に便利な土地として作家たちが移り住むようになります。区内に集まった作家や挿絵画家は現在まで一〇〇人以上にのぼります。

このコーナーでは、大正期から戦時中に焦点をあて、豊島区からスタートした児童文学雑誌『赤い鳥』と『びわの実学校』、豊島区に三〇年近く暮らした推理作家・江戸川乱歩の自筆原稿や、戦時中に全面削除を命じられた『芋虫』が収録された『江戸川乱歩全集』（平凡社、一九三一年五月〜一九三二年五月）などを展示しています。



平凡社版『江戸川乱歩全集』全13巻、
『犯罪図鑑』付き

描かれた豊島区

豊島区の風景は、池袋モンパルナスの時代から現代にいたるまで、創作の題材とされてきました。本コーナーでは、收藏美術作品より、

鶴田吾郎《雪の池袋》

春日部たすく《千川通り桜》

小宮秀雄《立教大学（2）》他二点を展示しております。

アトリエ村があつた当時を彷彿とさせる絵画作品を豊島区の歴史と共にどうぞお楽しみください。



春日部たすく《千川通り桜》 制作年不詳 水彩、紙

まちの移り変わり―旧四町地域―

このコーナーでは、一九三二（昭和七）年に成立した豊島区の前身である旧四町（巣鴨、西巣鴨、高田、長崎）の近代以降におけるまちの移り変わりを当時の写真から振り返ります。

巣鴨・西巣鴨地域では、山手線沿線（巣鴨駅、大塚駅、池袋駅）を中心に、巣鴨地域通り商店街の賑わいや戦後の区画整理以降に百貨店の建設が進む池袋駅周辺を写した写真をご紹介します。

また、高田・長崎地域では、宅地化に伴い暗渠になる前の弦巻川や千川上水の様子を写真から見ていきます。

現在の豊島区の姿を思い浮かべながら写真をご覧いただくと、新たな発見があるかもしれません。



市電大塚駅終点付近の写真
『西巣鴨町誌』（1932年）より

昭和のまち・暮らし・遊び

時代の流れとともに私たちの暮らしは日に日に便利になっています。電化製品の普及はもちろん、離れた場所での起こった出来事がすぐに情報として入手できたり、友だちと連絡を取りたい時はスマートフォンを使って話せる時代になりました。その一方で、かつては当たり前のように家庭や地域で行われていた季節の伝統行事などが、近年行われなくなり残念だ、という声を聞くこともあります。

ここでは、昭和三〇〜四〇年代の一般家庭の生活をイメージした二間の和室再現を行いました。また、すごろく、かるたなど、昭和時代のおもに室内遊び道具（玩具）が、展示ケース内に配置してあります。さらに、レファレンスルームには、ごはんを炊く道具、衣類などのシワをのばす道具、手や身体を温める道具をその変遷がわかるように展示しました。



「道具の変遷」展示のようす

令和五・六年度新収蔵美術作品紹介

晩年期の高山良策・青緑色の幻想世界

今年度、新たに、高山良策（一九一七

―一九八二）の油彩画二点が豊島区の収蔵美術作品に加まりました。豊島区では、昨年度も、高山作品を九点収蔵しています。令和五・六年度に収蔵した高山作品から三点をご紹介します。高山良策は、シュルレアリスムの影響を受けつつも生涯にわたって独自の作風を追求した画家です。一九四五年から一〇年間、豊島区要町のアトリエ付貸家に暮らしました。絵画制作だけでなく、初期ウルトラマンシリーズの怪獣造形でも大きな功績を残し、「怪獣の父」の異名で多くのファンに親しまれました。

令和五・六年度に収蔵した一一作品から、晩年期に描かれた油彩画を中心にご紹介します。こちらの図版は、『沈む心』（一九七七）『妖怪プラザⅡ』（一九八二）『隠の火』（一九八一）の三作品です。共通して、鮮やかな青緑色が眼を惹きます。一九七〇年代の後半より、高山は、このような青緑色を多く用いました。『妖怪プラザⅡ』『隠の火』の二点は、それらの作品群の中でも、鮮やかさで群を抜く作品です。同年に制作され、ほぼ同じ寸

法であるこの二作品には、妖怪のモチーフや、赤と青の球体など、共通点を数多く見出すことができ、連作である可能性もあります。『沈む心』は、小品ではありますが、青緑色を使い始めた最初の時期の作品であると同時に、作風が大きく変容した年に描かれた作品として重要でしょう。この作品が描かれた一九七七年、高山は、それ以前の写実的な表現から、作風を大きく変えました。一九七七年から、一九八二年に六五歳で逝去するまで



左：高山良策『妖怪プラザⅡ』（1981）75.2 × 55.0cm
右：高山良策『隠の火』（1981）75.2 × 55.2cm

に描かれた作品群には、異形の人々や沼といったモチーフが繰り返し現れます。今回とりあげた三作品に使われている青緑色や、より「沼」のイメージを強く想起させる、茶色の混じった緑色が画面全体に使われた作品も多く、モチーフも相まって、現実世界と異界が入り混じったような、幻想的な雰囲気醸し出しています。『妖怪プラザⅡ』『隠の火』に描かれた、人型の妖怪や人体の一部、水中や陸上に潜む生物といったモチーフも、どこか異界を連想させはしないでしょうか。高山の日記（一九七七）などによると、『沈む心』は、「黄泉返る沼」というシリーズの一作品です。沼というモチーフについて、高山はこう述べています。「私の連想を刺激するのに十分な所である。いつもその付近を散策しながら私はイメージの展開を始める。」（註一）シリーズ名にも表れているように、高山にとつて、沼は、現実世界にありながら異界への連想を誘う、黄泉の国への入り口のような



高山良策『沈む心』（1977）
23.0 × 15.7cm

存在だったのかもしれない。

今回取り上げた、一九七〇年代後半～一九八〇年代に描かれた油彩画のほか、令和五年度から六年度にかけて、出征中に描かれたスケッチや、戦時下と思われる国民服姿の自画像、同じくアトリエ村に暮らした画家・山下菊二（一九一九―一九八六）との交流の中で生まれた作品などが、新たに収蔵作品となりました。その中には、これまで回顧展等で展示されたことのない作品もあります。高山良策はこれまでも、当区のコレクションにおける主要な作家の一人でしたが、より一層、その多様な制作を知ることができるようになりました。『妖怪プラザⅡ』『隠の火』は、令和五年度所蔵品展「くらべてみる！ 五つの窓から」で展示していますが、その他の新収蔵作品も、今後、展示・公開の機会をつくってまいります。どうぞ、ご期待下さい！

（美術 遠藤茉莉花）

【調査協力】 足利市立美術館

【引用文献】（註一）高山良策「沼の恋人たち」季刊『バリ通信』NO. 4（四巻四号）、一九七〇年五月二〇日、東広企画、九三頁
【参考文献】『高山良策の世界展』（展覧会カタログ）練馬区立美術館、二〇〇一／『高山良策 空想する闇と光』（展覧会カタログ）足利市立美術館、二〇二一

としま文学。プロムナード 関連講演会レポート

収蔵資料展「としま文学プロムナード」

(二〇二四年一〇月一日～一二月一五日)

では「地域と文学」をテーマに、これまで文学・マンガ分野で収集した資料に係る作家や事象について、年代を越えて地域ごとにご紹介しました。来館者アンケートでは、区内に多数の作家が住んでいたことに対する驚きや、本展で初めて知った作家に興味を持ったという感想を書いて下さる方も多く、ゆかりの作家についてより幅広く知っていたいただく機会になったのではないかと思います。

本展の関連イベントとして、豊島区と文学を語る上で重要な児童文学者・坪田譲治と、推理作家・江戸川乱歩をテーマに、二名の講師をお招きし、講演会を開催しました。

①「豊島区と児童文学―坪田譲治は、なぜ『びわの実学校』を創刊したのか―」

講師：宮川健郎氏（一般財団法人 大阪

国際児童文学振興財団理事長）

日時：一〇月一二日（土）

一四時～一五時三〇分

児童文学者の坪田譲治がいかにして

『びわの実学校』を創刊したか、という内容を児童文学研究者の宮川氏にお話しいただきました。



長く西池袋に住んだ坪田は、児童文学作家の新人の発掘と育成のために一九六三年に『びわの実学校』を創刊しました。一九六〇年代は、社会が大きく変わっていく中で、児童文学においても戦前の童話から現代児童文学へと移行していく転換期であったといえます。坪田が『びわの実学校』を創刊するに至った経緯を中心に、児童文学史全体の流れについてのお話を伺うことができました。

展示の関連事業として、児童文学についてご講演をお願いするのは豊島区では初めてだったため、ご参加いただいた皆様も大変熱心に聴講いただき、質疑応答の時間も多数のご質問をいただきました。

②「生誕一三〇年 乱歩と池袋―多彩な交友関係を探る―」

講師：後藤隆基氏（立教大学江戸川乱歩

記念大衆文化研究センター特定課

題研究員）

日時：一一月二四日（日）

一四時～一五時三〇分

二〇二四年に生誕一三〇年を迎えた江戸川乱歩の交友関係を中心として、池袋での暮らしについてもお話しいただきました。

戦時中、町会の副会長として町のひとびととの関わりが増えていった乱歩ですが、区内在住の芸術家たちとも親交がありました。池袋に居住した画家の橋小夢に関して、乱歩自らが制作を依頼した可能性のある作品が所蔵されていることや、橋の個展の案内に乱歩のコメントが掲載されていること、また、乱歩邸の隣に住んでいた鍍金工芸家の森村酉三は、乱歩に町会役員になるよう依頼をしたというエピソードなどをご紹介いただきました。

した。

特に、本展でもご紹介した詩人・田村隆一との関係については、田村の結婚式の引き出物として参列者に配られたという、乱歩が歌う「城ヶ島の唄」のレコードの音声を聴かせていただきました。講演会参加者のアンケートにも、乱歩の歌声が印象に残ったとのこと感想を多くいただき、とても貴重な機会になったのではないかと思います。



宮川先生、後藤先生、ご多用のところご講演いただきまして本当にありがとうございます。

文学・マンガ分野では今後も区ゆかりの作家に関するさまざまな展示や事業を開催したいと考えております。みなさまのご参加をお待ちしております。
(文学・マンガ 佐伯百々子・西方ゆり恵)

江戸時代に受け継がれた中世の記憶

鎌倉街道・地名をめぐって

中世豊島区域に関する歴史資料(史料)には、国立公文書館内閣文庫所蔵「豊島・宮城文書」をはじめ、『吾妻鏡』や『太平記』など、中世に作成された歴史書・軍記物もあります。

実は、中世豊島に関する史料は、江戸時代にも存在します。ここでは、江戸時代の人々の視点から、鎌倉街道・地名を軸に中世豊島の姿に迫りたいと思います。

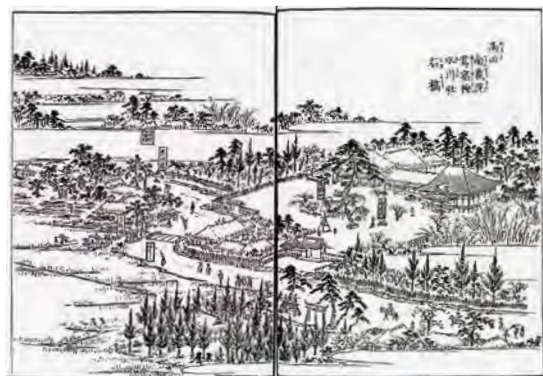
1 鎌倉街道

鎌倉街道とは、鎌倉幕府開設以来敷設された中世古道を指します。「鎌倉街道」という言葉は、中世史料にはみえないので、江戸時代の人々が使い始めた言葉と考えられています。例えば、『江戸名所図会』(一八三四・三六年)では、「大鏡山南蔵院」の項において、「此地ハ昔鎌倉街道の通路なりとて、鎌倉街道の楓樹と号くるもの、今その境内に存せり」とあります。また、『新編武蔵風土記稿』(一八二八年)では、下高田村の項において、「南北へ貫ける一条の道は古の奥州道と云」とあ

2 地名

り、江戸時代の人々が、この地に古道が通っていたと認識していたことが分かります。

戦国大名北条氏康が作らせた、家臣の役高を記した帳簿「小田原衆所領役帳」(一五五九年)には、池袋・菅面(巢鴨)・雑司谷など、現代でも使われている地名が記されています。この史料は、江戸時代の写しのみが現存しています。室町



▲南蔵院『江戸名所図会』
この地は昔鎌倉街道が通ったという

時代の豊島区域を描いた「長祿江戸之絵図」(一八四七年、『豊島区史 地図編』上巻に掲載)は、この史料をもとにつくられたといわれています。

また、雑司が谷の地名の由来について、『新編武蔵風土記稿』は、元弘・建武(一三三二〜三六年)ころ、禁中の「雑土」柳下若狭・長島内匠・戸張平次左衛門が土着したことから由来するという説を紹介しています。中世の歴史が伝承という形で江戸時代にも受け継がれているといえるでしょう。

中世史料からは、豊島の地域社会の様相について不明な点が多いです。江戸時代に受け継がれた豊かな伝承・言い伝えは、中世における地域の歴史の記憶を反映したものとして、貴重といえるでしょう。

【参考】『豊島区史 地図編』上(一九七四年)『豊島区史 資料編』一・三(一九七五・七九年)

(郷土 福丸恭昂)

編集後記

「かたりべ」一五一号をお届けします。現在、開館四〇周年記念企画展「新・豊島風土記」を開催中です。郷土、美術、文学・マンガの三分野が連携して、企画展示室のほか常設展示室とレファレンスルームにも作品・資料を展示しています。

今回の見どころの一つは、令和四年度の区制施行九〇周年企画展「昭和の暮らしと遊び」で好評だった、昭和三〇〜四〇年代の暮らしをイメージした和室二間の再現展示です。大部分が区民の方からの寄贈資料で構成されています。開館して四〇年が経過し、時代の移り変わりとともに、生活様式も大きく変化したことを実感します。畳の部屋に上がって、実際に使われた生活資料を見ながら、来館者の皆さんが世代をこえて語り合う光景が印象的です。

今回、まちの移り変わりがわかる大正・昭和期の写真もあわせて紹介しています。また会場ではクイズラリーのほか、図録・グッズも販売中です。

詳しくは当館ホームページや公式Xをご覧ください。皆様のご来館をお待ちしています。



(横山)

かたりべ
No.151



2025年2月20日
・
豊島区立郷土資料館
・
東京都豊島区西池袋2-37-4
としま産業振興プラザ7階
・
電話 03-3980-2351

